実践レポート

児童の自己調整力を育むＡＡＲサイクルの活用

－発達段階に応じた「ふり返り」の系統的実践を通して－

観音寺市立柞田小学校
教諭　　大平　理茶子

１　はじめに

現在、世界規模で引き起こされる社会的変化が人知を超えて進展するようになり、予測困難な時代を迎えていると言える。このような時代を生きていく子どもたちは、与えられた課題に正しく答える力だけでなく、自ら課題を見つけ、解決に向けて主体的に取り組み、その過程をふり返って次に生かすという、自己調整力の育成が不可欠である。

しかし、令和５年度全国学力・学習状況調査(児童質問紙)によると、「授業で学んだことを、ほかの学習で生かしている」と肯定的に回答した児童は 76.3%にとどまり、約４人に１人が学びをつなげることができていないという実態が明らかになった。これは、学習内容の理解や知識の定着だけでなく、それを活用する力、すなわち「学び方」が十分育っていない可能性を示唆している。

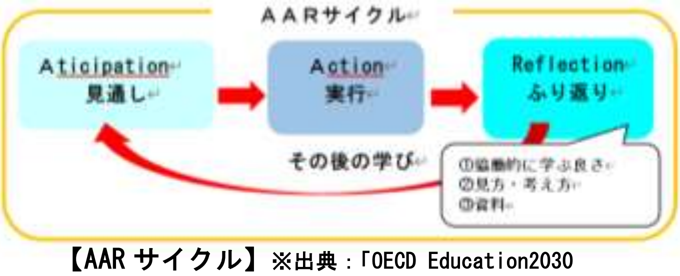
このような状況を踏まえ「学んだことをふり返り、次の学びにどうつなげるか」を意識化する仕組みとして、ＡＡＲサイクルとそのふり返り活動に注目した。自分の学びを客観的に捉え、改善発展させるという一連のプロセスを日常的な学習に組み込むことで、子どもたちが自律的に学びを進める力を育成することができると考えた。

本実践では、ＡＡＲサイクルを活用したふり返りの工夫を通して、子どもたち一人ひとりの自己調整力を育むことを目的に取組を進めることとした。

２　実践の内容・方法

（１）自律した学習者を育てるＡＡＲサイクル

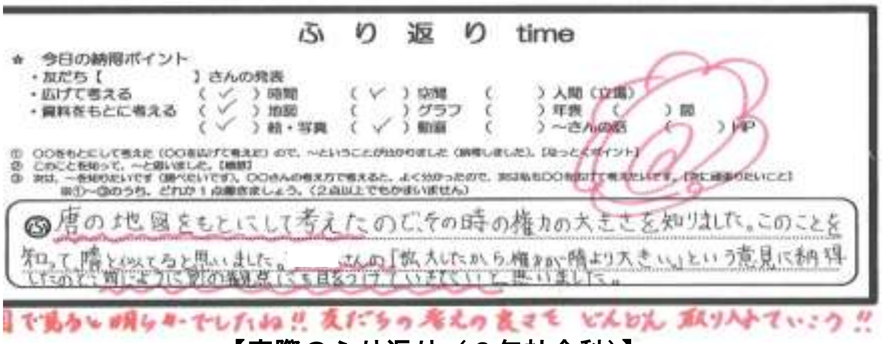
本校では、自律的な学習者の育成を目指し、ＡＡＲサイクルを活用したふり返りを取り入れた。このふり返りは、「自分はどのように学び、どのように変容したか」という学習方法そのものに目を向けるものである。



【AAR サイクル】※出典：「OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来」

その際、「次の学びにつながる見通しを持つ」ことを目的として、観点を明確に示した「ふり返りカード」を活用した。これにより、「今日は地図を見るとよくわかった。次も、地図をよく見たい。」など、自らの理解の要因を意識し、次の学びに活かす姿が見られるようになった。

このようなＡＡＲサイクルに基づくふり返りを継続することで、「調べ方」や「考え方」の選択肢が広がり、学習の質が向上した。社会科の学習では、例えば「唐の地図をもとに考えたこと」「友だちの意見に納得できたこと」など、解決要因を明確に述べる児童も見られた。さらに、「次は自分も○○さんのような視点で考えたい」といったように、他者の学びから学ぶ姿も育まれている。



【実際のふり返り（６年社会科）】

このように、学び方に焦点を当てたふり返りを日常的に行うことで、協働的な学び、資料の活用、見方・考え方の活用といった学習方法のよさを実感できるようになった。

結果として、自らの力で問題解決できたという達成感を得る児童が増え、次の学びへの意欲向上にもつながった。

（２）ＡＡＲサイクルを活用するための素地づくり　- 発達段階に応じたふり返り -

学び方をふり返るという手法は、メタ認知を必要とするものであるが、低学年段階では容易ではない。そこで低学年では、ふり返りにおいて「分かった！」「もっと知りたい！」など、自分の心がどう動いたか、情意面を整理するようにした。その際本校では、「ふり返りマスターへの道」として、段階的なふり返りレベルを設定した。低学年での目標をレベル２までに設定し、分かったことや感想、興味をもったことやもっと知りたいこと等を自分の言葉で表現する力を育てた。そうすることで中学年以降のＡＡＲサイクルを活用できる素地を育成していった。

１年生の「レベル１」の段階では、あらかじめふりかえりの視点を示しておき、その上で、子どもたちに「◎〇△」で自己評価をさせた。ワークシートを用いて、毎時間の最後に自分の頑張りをふり返ることで、「登場人物になりきって読めた」「大きな声で読めた」など、その時間に自分ができたことを自覚できるようになった。このような小さな成功体験の積み重ねが自己肯定感を高め、次の学びへの意欲とつながっていった。

レベル１　【１年生】
できるようになったこと・わかったこと

↓

レベル２　【２年生】
レベル１＋興味をもったこと・もっと知りたいこと

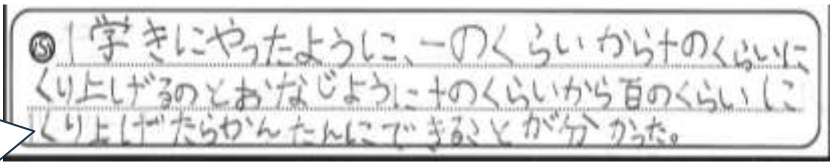
↓

中学年以降
AAR サイクルを活用

【発達段階に応じたふり返り】

２年生が目標とする「レベル２」では、次の学びにつなげることを意識させるために、「もっと知りたいこと」「調べてみたいこと」等の視点にも意識を向けさせた。子どもたちからは、既習と本時の学びをつなげた気づきが生まれた。さらに、教師の「だれの考えが分かりやすかった？」という問いかけで、「A さんの考えがよかった」「B さんの工夫をまねしたい」と、友だちの学びに目を向け、次の目標とする子どもたちも現れてきた。このように、ふり返りを通じて、自分だけでなく友だちの考えからも学びを得ようとする姿勢が少しずつ育ってきたことが分かった。

１学期にやった一の位から十の位と同じように、十の位から百の位にくり上げたらいい。



【既習と本時の学びをつなげてふり返った２年生のふり返り】

その結果、３年生の５月には、既習と本時の学びを比較して、「テープ図より線分図のほうが『は・か・せ』なので、次からは線分図を使いたい。」と、より良い方法を判断し、次時につなぐふり返りができるようになった。

（３）さらに効果的なふり返りにするために - 校内研修で教員もふり返る -

この実践をより効果的なものにするために、今年度初めの校内研修において、ふり返りの在り方を全教職員で検討した。学年ごとに児童の発達段階に応じた支援の工夫や、学習内容との関連性を意識した指導のポイントなどを共有した。例えば、低学年では情意面に焦点を当てたふり返りの方法や話型の提示の仕方、中学年以上ではより深い自己評価を引き出すための問いかけの工夫など、実践的な知見を集約した。

また、経験年数の異なる教員間でも、同じ視点でふり返り活動を指導できるよう、具体的な支援の方法や児童の記述に対するフィードバックの仕方を話し合った。各学年団が、今、自分たちの目の前にいる子どもを思い浮かべ、より効果的な方策を検討し共通化することで、全校で実践の質の均一化を図った。このような取組により、児童の学びに一貫性が生まれ、学校全体でふり返りの文化を醸成することにつながっている。

―持続的に取り組み、さらに高めていくために―

【時間を確保するために】
・タイムマネジメントの工夫
・教科、単元等を決めて実施
・ICT の活用

【児童への指導】
・ふり返りの視点を話型化
・低学年は記号で評価
（◎〇△や☆の数で）
・助言の工夫

３　実践の成果

令和５年度と令和６年度の全国学力・学習状況調査（児童質問紙）を比較した結果は以下のとおりである。

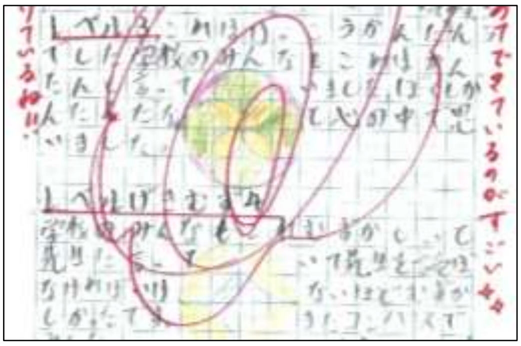
	設　問	令和６年度肯定的回答の割合	令和５年度との比較
1	課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか。	89.7%	＋3.6%
2	学習した内容について、分かった点や、よくわからなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか。	89.7%	＋9.1%
3	授業で学んだことを、次の学習や実生活に結び付けて考えたり、生かしたりすることができると思いますか。	96.5%	＋20.2%

このような大幅な向上は、児童が日常的に自分の学び方をふり返り、次の学習への見通しを持つ習慣を授業で確立してきた成果だと考えられる。特に設問３では、社会科で実際に社会課題に取り組む人々を紹介し、学びが実生活とつながっていることを児童が実感できたことが、効果を高めた。

また、「学びに向かう力」を高めるための自主学習の取組も功を奏した。自主勉強発表会やモデル掲示を通じて児童同士の相互承認を促す工夫を重ねた結果、自主学習への取

組冊数は前年度比で大幅に増加し、令和６年度は1,116冊（前年度993冊）という成果を収めた。内容も、自分でレベルを設定して復習をしたり、校外学習に向けて興味をもったことを調べたりするなど、知的好奇心の伸びを感じさせるものが増えてきた。

【校外学習に向けて興味をもったことを事前に調べた自主勉強】



【自分で課題のレベルを設定して行った自主勉強】

４　普及させたい取組と期待される効果

主体的・対話的で深い学びの実現には、知識・技能の獲得にとどまらず、自らの学びに向き合う力や学びを他者と共有し、深め合う姿勢の涵養が求められる。

本校では、このような資質・能力の育成を目指し、発達段階に応じた「ふり返り」の在り方を４年間にわたって継続的に研究・実践してきた。その結果、児童一人ひとりが自分の学びを見つめ直し、次に何をどう学ぶべきかを自ら考える姿が徐々に育まれてきたことを実感している。

特に、低・中・高学年の発達段階に応じて、ふり返りの視点を系統的に整理・明確化し、学習後に内省する時間を日常的に確保することで、児童が学びを自分ごととして捉え、次の行動へとつなげる力を確実に伸ばすことができた。こうした子どもたちの姿は、教育の本質的な目的である「生涯にわたり学び続ける力」の育成につながると考える。

５　課題及び今後の取組の方向

先述した校内研修で本実践への課題として以下のことが挙がった。その課題の解決策は下の通りである。

課　題	今後の取組
ふり返りを行う時間の確保が難しい。	①時間が確保できるように、一時間のタイムマネジメントの工夫を行う。 ②すべての時間に行うのではなく、教科や単元、時間を決めて行う（学年団で共有・統一して実践） ③ＩＣＴを活用する。
事実や感想以上のことを書くことが難しい児童への手立てに悩む。	ふり返りの視点をさらに明確化 ①視点を話型で提示する（前と比べて～、〇〇を見て～等） ②特に、低学年は３段階で評価できるように表し方を工夫する（☆、☆☆、☆☆☆等） ③「何が分かったから？」「何を使ったから？」等、全教員がより具体的に助言ができるようにする。

今後の取組を考える中で、上記のようなこれからの課題も顕在化してきた。今後も、ふり返りに対する発達段階に応じた支援を各学年団で話し合いながら、すべての子どもが自己をふり返ることができる視点や助言を研究していきたい。

【参考文献】

・白井　俊　「OECD Education2030プロジェクトが描く教育の未来」ミネルヴァ書房 2020年
・木村　明憲「自己調整学習　主体的な学習者を育む方法と実践」明治図書 2023年